

隨想 ずいそう

忘れ得ぬへき地

阿部 良全



「地教育研究校」の指定を受けた。今まで研究校など一度も経験したことのない二十歳代の若い先生方ばかりであった。でも先生方はたくましく立ち向かつた。

「自ら学びとる力を育てるための個に応する指導」を研究主題として、年八回の授業研究、更に一人月二回、校長・教頭参観指導の自主授業を継続し、自らの指導力を高めていった。個への手立てをとり入れた指導過程を編み出し、個人カルテを作成し、学習訓練に力を注いで昭和五十八年の秋、多数の参加者を得て公開発表を終え、大任を果たしてくれた。

春の遠い山里は、五月はじめ一斉に花開き、やがて、わらび、桜の芽が崩える。短い夏は頭上の雷鳴に驚き、錦の衣を纏い始める山のうつろいに秋を知り、靈山の夕映を飽かず眺めた。そして長く厳しい冬。幻想の地吹雪。万物凍るような中で軒から垂れる一メートルのつららを見た。

私は昭和五十六年から三年間、県北端の阿武隈山頂、相馬市立玉野小学校に勤務した。複式二学級、単式二学級のへき地小規模校であった。二年目、降つて湧いたように文部省から「へき



山の子どもらと別れる日であった。
「校長先生、ばく、何にも上げるものないけど、これ、持つて行つてー」
男の子が紙袋を差し出した。何も入つていなかった。

「この中に玉野の空気が入っています。
私は絶句した。何という素朴なアイデア、そして、心こもる贈り物であろう。今なおこのことは思い出すたび胸を潤ませる。

純真で明るく、自己を伸ばそうと努力した子ども達、目標に向かいひたすら取り組んだ職員たちを、私は終生忘ることはできないだろう。へき地の学校に教育の原点を見た。

私はいま、県の東南端、海のある学校にいる。校舎改築中で多目的スペースを取り入れた学校づくりが進められている。その活用法を探り個に応ずる指導法を求めて、私はまた一つの目標ができた。教職の道、生き甲斐あり。まこと、有難きかな。

(いわき市立江名小学校長)

誰言うとなく「靈山」と「良全」に懸けた「りょうぜん会」が生まれ、年一回、思い出話に花を咲かせ、人の世の出会いの尊さをかみしめている。

○よきことの山の三とせを憶いて
仰ぐ碧天 雲ひとつなし

F君の思い出

富岡 ケイ子

山の子どもらと別れる日であった。
「校長先生、ばく、何にも上げるものないけど、これ、持つて行つてー」
男の子が紙袋を差し出した。何も入つていなかった。

「この中に玉野の空気が入っています。
私は絶句した。何という素朴なアイ

「先生、自分の顔、描いても、いいのがや」

次の時間に、友だちの顔を描くので休み時間に二、三人のグループになつているようにと話をしたときのこと。変なことを言うF君だな、と思ったが、

「友だちの顔を描くんだよ」と言つて、私は教室を出た。そして、教室へ戻り、愕然とした。友だちと向かい合うこともなく一人でいるF君の机の上には、鏡が置かれてあつたのだ。私の体全身に、さつきの言葉がつきさってきた。自分には、描く友だちがないことを知つていての私への心の訴えだつたのだ。それが分かつてあげられなかつた自分がなんとも情けなくなつてきた。

周りの子は、楽しそうに、お互に顔をさわつたり、特徴は何かなど話をしたりしている。どこかにF君もまざって

